

Libro de Alexandre (XI)

Translated by OTA Tsuyomasa

Abstract

The Libro de Alexandre is a great epic poem that consists of 10,700 lines and was supposedly written in the first third of the thirteenth century. This poem is not an ordinary biography of Alexander the Great, because the story is interrupted by many diverse episodes such as those of the Trojan war which took place about 1200 years B.C. according to historians, and those of the Old Testament. Alexander the Great is a personage of the fourth century B.C. and this poem is written in the thirteenth century A.D. So, in this work by an unknown author, perhaps a cleric, a mixture of ages is seen everywhere and that is the most remarkable characteristic of this epic poem.

This work is written in the erudite form of *cuaderna vía* (four-fold way), the style of which has been called *mester de clerecía* (scholars' art) as compared with *mester de juglaría* (minstrels' art).

This time traslation is made from the strophe 1762 to 1967.

アレクサンダーの書 XI

太田 強 正 訳

アレクサンドレの書は 13 世紀の最初の約 30 年の間に書かれたと推測される 10700 行からなる大叙事詩である。

これは 33 歳で早世したアレクサンダー大王の伝記であるが、普通の伝記とは異なり、大王が活躍した紀元前 4 世紀、トロヤ戦争が起こったと言われる紀元前約 1200 年、旧約聖書、そしてこの叙事詩が書かれた紀元後 13 世紀の話が混然として描かれている。

作者は無名の聖職者であろうと言われているが、Gautier de Châtillon の *Alexandreis* を底本として、その他の伝記、伝承を基にこの叙事詩を書いたようである。

作品はメステル・デ・クレレシーア (*mester de clerecía*) と呼ばれるもので、中世スペインの主に聖職者による教養階級の文学の流派のものである。これは文字の読み書きのできない吟遊詩人 (*juglares*) によるメステル・デ・フグラリーア (*mester de juglaría*) と対をなすものである。

形式はクアデルナ・ビーア (*cuaderna vía*) と呼ばれる 1 行 14 音節同音韻 4 行詩である。

今回は第 1968 連から第 2146 連までを掲載する。

訳は言葉が違うので韻を踏ませることはできなかったが各行ごとに付けた。そのため日本語として通るように原文にない接続詞などを補わなければならない箇所があった。

人名・地名などの固有名詞は原則、原文に従いスペイン語読みとし、日本で普通用いられているものについてはそれに従った。

翻訳に当たっては現代スペイン語訳の他、英訳を参照した。また部分訳ではあるが日本語訳も参考にした。

1968 王は新婚であったけれど長い休息は望みませんでした
 拍車をつけて、馬で遠征しようと思いました
 インドに下りポロ王を探しに行きました
 疲れていましたが、遅らせたくありませんでした

1969 決して怠惰ではない悪魔は
 善人に害を与えるために常に道を探しています
 昔から野心家でずる賢いので
 自分の偽りの塩入れからそこに塩をこぼしました

1970 人々は王に大嘘を信じさせました
 真に忠実なクリトゥスとアルドフィロが
 王についてくだらない事を言っていると
 王は二人を殺させました—ずいぶん残酷な事を命じたものです—

1971 私は王たちの友情というものは確かなものだとは思いません
 というのは彼らは簡単に多くの虚しい言葉を信じてしまうのです
 友情は一夜のうちにたちまち溶けてしまいます
 故無く人を吟味しようとして

- 1972 アルドフィロとクリトゥスは三日前には
非常に名誉があり、とても力のある人物だったのですが
味方もなくひどい退けられ方をしたのです
この世を信じる者は悪い時に生まれたものです
- 1973 直ちにインドに噂が広まりました
アレクサンダーがその地に入ると
ポロ王は気に入らずひどく恐れしました
彼はその知らせを不快で苛立たしく思いました
- 1974 ポロ王は全インドにお触れを出すよう命じました
急がせるために王の印で封印して
皆がすぐに一つの場所に集まるようにと
決断を下す必要があったからです
- 1975 恐怖に駆られて民々はすぐにやって来ました
事態を恐れて皆武装し
やぐらを背負った象を連れてきました
象は勇敢でとても力強い動物です
- 1976 象は非常に勇敢な動物で
背中には非常に大きな木造の装置を背負っています
多くの騎士を運ぶことができるやぐらです
少なくとも三十人あるいはそれ以上—うそではありません—

- 1977 象はどうしてもいつも立っていなければなりません
脚を折り曲げると伸ばすことができなくなります
またどうしても横になることは出来ません
たまたま転べば起き上がることはできません²¹⁴⁾
- 1978 象が非常に疲れて休もうとする時には
丈夫な大きな木を探して
そこに首をかけて安全に眠ります
この種のものは皆このような習慣を持っています
- 1979 もし猟師がその事に気付けば
周りの木をのこぎりで切ります
物知りの男は少し残しておきます
その影が君たちの気に入らない程度に
- 1980 すぐに愚かな動物が習慣どおりやって来て
木にしがみつきますが、すぐに倒れます
立てなくなり、たちまち首を切られます
その骨から上等の象牙が作られます
- 1981 そのような装備を施した象を
三百頭以上ポロは軍に連れて来ました
強力な装置である鎌付の戦車は
一万四千と八百台揃えて来ました

- 1982 騎士だけで、皆立派な出ですが
三万人を優に超えていたでしょう
大きな仕事するためにさらに多くの歩兵がいました
山に生えてる葉や休耕地の草よりも多くの
- 1983 次のような知らせが王のもとにありました
ポロが王と戦いを始めたがっていると
王は大喜びで飛び跳ね始め
伝令に十分な褒美を与えるように命じました
- 1984 直ちに王は手紙を秘書に書くよう命じ
ポロにそれは自分の喜びとするところだと書いて送り
わざわざ来る必要はない
自分がすぐにそちらに会いに行くからと言ってやりました
- 1985 アレクサンダー王は非常な策略家で
戦場で会い見えるのをとても楽しみにしていました
というのも寒さも暑さも彼を止めることはできず
すべてを小事と思う非常に我慢強い人物でしたから
- 1986 アレクサンダーはポロと顔を会わせるのを強く望んでいたので
昼も夜も歩みを止めませんでした
それで手紙を持って行かせた男に
—すごい事です—が—追いついてしまいました

- 1987 ギリシャ人たちは多分さらに歩いたのでしょう
しかし川に行き当たりました—アダピス²¹⁵⁾ という名です—
夏も冬も浅瀬はできません
幅も深さも並外れた川です
- 1988 このような事が起りました—神がそう導こうと望んだのです
神は素早く事を用意する事を望みました—
ギリシャ人たちが河岸に居を構えようとしたとき
向こうに側にポロの軍勢がいるのを見ました
- 1989 アレクサンダーは喜んで彼らに攻撃をしかけたかったでしょう
しかし浅瀬が見つからなかったので、渡ることができませんでした
た
唇を噛んで、非常に腹を立てていました
ポロを見据え、悪魔を呪いながら
- 1990 どうにか渡ることができたとしても
ポロは岸から彼らを追い払うことができたでしょう
ギリシャ人たちは方法も道も思いつくことができなかったでしょう
う
思う存分戦うために彼らのところにたどり着くために必要な
- 1991 真ん中に島が突き出ていていました
四方から水にすっかり囲まれていて
そこに至るのは極めて困難でした
川は深く、渡るには広がったからです

- 1992 島については今はこれ以上話したくありません
もう一度それに戻って来るでしょうから
二人の良き友についてあなた方にお話ししたい
私たちはちょっ悲しいことを聞くことになるでしょう
- 1993 ギリシャ人たちの中に二人の親愛なる若者がいました
一人をニカノル、もう一人をシマコスと言いました
彼らはとても勇気があり、非常に高貴な出でした
—そのような二人には輝かしい場所が当てがわれています—
- 1994 二人は同じ日の同じ時刻に生まれました
両者は正確に計ったように同じでした
とても似ていて、同じ服装をしていました
良くも悪くも二人はとても仲良しでした
- 1995 一人が、《おい、これをしよう》と言うと
もう一人がすぐに用意ができていました
一人がわずかな仕草もしませんでした
もう一人が《適当な機会ではない》²¹⁶⁾ と言いそうな
- 1996 もし彼らが何かを探ろうとしたり
情報を集めたり、食料を確保したり
町を奪取したり、軍を見張ったりするときには
決して一方だけで行動するのを見ることはなかったでしょう

- 1997 その上互いに非常に愛し合っていたので
別れることはできなかったでしょう
共に食し、共に寝ていました
服装も同じ物をまとっていました
- 1998 一方が何か言おうとすると
もう一方がすぐにそれを実行しようとしてしました
どちらも自らが危険を冒すか死のうとしてしました
相手の過ちを耳にするよりは
- 1999 シマクスがあることを考え始めました
ニカノルはそれが分かりましたが、落ち着いていられませんでした
彼が何を試そうとしているのか考えて
進んで先を越そうとしていました
- 2000 《君に言おう—シマクスは言いました—我々はひどく騙されている
我々と我々の王は非常に危険にさらされている
我々はインドで葬られる方がまだ
わずかな距離で苦しむなら
- 2001 我々は何かわざを探さなければならない
ポロを対岸から退かせることができるような
もし我々が達成できれば、名誉となるだろう
死ぬことになっても、大きな名声をもって果てることのできるの

だろう

- 2002 もし我々がこの川を渡ることができて
どうにかして島に入ることができたら
ポロに大きな苦痛を与えることができたろう
後は戦う余地はほとんどないだろう》
- 2003 シマクスがまだ言葉を終わらないうちに
ニカノルは彼の言っていることが分かり、すぐに立ち上り
言いました：《私は君に誓うよ、シマクス、私の大事な友よ
君が私に言っていることは私も考えていた》
- 2004 彼らは陸に留まらず、剣を運び
わずかな、しかし重くない武器を身につけ
逆巻く波を泳ぎ始めました
島に入るために彼らは決然としていました
- 2005 ギリシャの騎士達が
この二人ががこのような大胆な行動を取っているのを見ると
彼らに続いて非常な勢いで川に入りました
軽々しさは全然ありませんでした
- 2006 シマクスが最初に島に着くと
ポロの手の者がすでに丘を占拠していました
シマクスは直ちに騎士として彼らに襲いかかり
岸から半マイル以上彼らを後退させました

- 2007 インド人達は直ちに救い出されました
しかしそうこうするうち他のギリシャ人達が皆到着しました
あちこちで戦闘と叫び声があり
戦闘服は他の服以上には役立ちませんでした
- 2008 投げ槍の非常に厚い雲が飛び交って
空気を引き裂き、太陽をまったく見えなくしていました
ポロの側の者達は徹底して攻撃してきました
しかし他方ギリシャ人達も彼らを好く抑えていました
- 2009 シマクスは一祝福があらんことを一計画的に
多くの強敵を倒しました
彼の友ニカノルは怒れる蛇のように
執拗な相手方の心を砕いていました
- 2010 ギリシャ人達は優秀であつたけれど、持ちこたえることができず
少数であつたため、そこで苦戦することになりました
他方インド人達は存分に攻撃できたので
王子アンティゴヌスを殺すことができました
- 2011 ギリシャ人達はアンティゴヌスのことで非常に怒っていました
彼を残念に思い、自分たちが力を削がれたと思ったからです
くさび形の隊列を作り、盾に腕を通し
皆低く構えてインド人達のととの戦闘に戻りました

- 2012 インド人の多くを殺し、その場に残しました
彼らはどこでもこんなうまい具合に行ったことはありませんで
した
これで大いなる名誉をもって帰ることができたでしょう
しかし狂った勇氣は彼らを欺くことになりました
- 2013 分別のない無謀な男というのは
窮地に立つとたちまち途方に暮れ
分捕り品や戦利品を持って戻って来ません
—私の考えを君たちに言おう：私はそれを狂気だと思う—
- 2014 皆戦闘で熱くなっていました
大いに戦い、弱っていました
ポロの軍勢は多くの武装した兵士が到着しました
最初に来た三倍の兵士が
- 2015 兵士達は上陸するや戦い始めました
たちまち優れた十五人のギリシャ兵が死にました
あなた達が聞いたあの二人の友を除いて
他の者達は息つく暇もありませんでした
- 2016 忠実な友達だけが残されました
他の者達は死にました、しかし大いに名誉ある者達でした
彼らの間にあの二人が取り残されていました
ちょうど狼の中に生れたばかりの羊がいるように

- 2017 インド人達は二人が逃げないだろうと確信していました
というのは他の助けを全然期待していなかったからです
彼らは非常に疲れていて、あえて戦おうとしませんでした
しかしそれでも戻ろうとはしませんでした
- 2018 二人はある苦悩を抱えていました、ただ一つの心痛です
二人ともお互いの死を見ることを恐れていたのです
どちらも自分の死が価値あるものと思っていませんでした
どちらも先に喜んで行こうとしていたことでしょう
- 2019 人々がたまたまニカノルを襲おうとすると
シマクスが進んで攻撃を受けていました
ニカノルは同様に自分が死ぬことを望んだのでしょうか
シマクスの苦境を見たり聞いたりするよりは
- 2020 二人がお互いに護衛していると
二本の槍が宙を飛んできて
二人は倒れて死に、軍は敗れました
しかしインド人達は勝ち誇ってはいませんでした
- 2021 もっとも忠実な最良の二人の友
彼らは一つの意味でこのようになったのです
このような者達は今まで生まれたことがなかったでしょう—私は
本当のことを言っていると思います—
キリスト教徒の間にもこのような友情はあまりありません²¹⁷⁾

- 2022 ギリシャ軍の間には大きな苦悩がありました
損失は大変なもので、混乱は更なるものがありました
彼らにはこんなに不快な日はありませんでした
なぜならこの二人が若者の花でしたから
- 2023 ポロは勝利して有頂天になりました
自分たちに向かって来る者はいないと思っていました
しかしギリシャの王はその全損害にもかかわらず
全然意に介していませんでした
- 2024 アレクサンダーには一つの心配が心にありました
どうしても川を越えることができないと
神と剣を信じていたので
もし渡河できれば、事は解決すると
- 2025 ポロは大きい男で、広い心を持っていて
船よりも大きな象を率いてました
彼は獐猛な巨人族²¹⁸⁾の出で
彼を見るだけで恐ろしくなりました
- 2026 ポロは多くの獐猛な巨人達を伴っていたので
ギリシャ人達は恐怖を感じ、考えが乱れていました
もっと前に退却しなかったのは、自分たちの間違いだと思い
不幸な結果になるのではないかと皆恐れていました

- 2027 しかしアレクサンダー王は苦境に慣れており
どんな危険にも決して動ぜず
非常に快活にしっかりと勇敢に立ち回り
過去の窮地などまったく意に介しませんでした
- 2028 王は非常な分別と類稀な鋭さの持ち主で
自分の悲しみや怒りを隠すことをよく知っており
機知に富んだ術策を思いつくことになりました
一人が存在する限り、それは手柄と思われるでしょう—
- 2029 幸運な王は配下に
多くの良き臣下、多くの良き親戚
多くの良き友、そして多くの良き召使いを持っていました
このような者達を持っていて、王はしっかり守られていました
- 2030 他のすべての者の中に一人の騎士がいました
—彼は王と共に育てられ、王の親衛隊員でした—
戦士である良き主人に非常に似ており
あたかも腕の良い大工が彼らを作ったようでした
- 2031 体も、顔も、姿形も
歩き方も、様子も、馬の乗り方も
すべての姿において兄弟のようでした
その事だけで彼らはとても幸運でした

- 2032 ポロはアレクサンダーに目を据えていました
どこへ行くにも、しっかり見張っていました
後衛にいても、狩りに出ても
ポロがアレクサンダーを目を見開いて見張っていました
- 2033 アレクサンダーは川を渡れる船や小船は持っていました
しかしどうしても密かに行くことはできませんでした
というのはポロが気付いて、彼らを襲ってくるかも知れなかった
からです
押し返されれば、渡ることはできなかったでしょう
- 2034 アレクサンダーが力では役に立たないと分かると
この強情な男がどうしようとしたか聞いてください
アタラウス²¹⁹⁾にアレクサンダーがいつもいる所にいるよう命じ
ました
アレクサンダーがいつも身につけている服装で
- 2035 ポロは騙されましたが、気付かないで
いつものように見張り塔にいました
しかしアタラウスが非常にうまく振舞ったので
見破ることはできませんでした
- 2036 アレクサンダー王は気付かれずに野営地を出て
気晴らしをするように、川岸を離れました
狩りに行くようにわずかなお供を連れて
このようにしてポロの目をごまかして行きました

- 2037 こうしているうちに黒い霧がわき起こり
真っ暗になり、どうすることもできなくなりました
アレクサンダー王にとっては非常に幸運でした
霧が彼の計略をすっかり覆い隠したからです
- 2038 アタラウスは自分の周りに音を立てることを命じました
ポロは夜の番兵だと思い、騙されました
用心深い王は船に乗り込み
僅かな時間でアダピスを渡りました
- 2039 直ちに王と共に非常に多くの良き兵が渡ったので
残った者たちは役に立たない者たちでした
ポロの兵士たちは裸で
無防備で、皆丸腰で横たわっていました
- 2040 アレクサンダー王は着くと
敵に次の対決まで猶予を与えようとせず
指示されたように先頭に立って動きました
しかし臣下たちにはしっかり守られていました
- 2041 ポロはまだ替え玉アタラウスに目を止めていました
虚しいものを確かだと信じていたのです
正午に彼のもとに伝令がやって来て
彼はギリシャ人たちに騙されていると言いました

- 2042 それから僅かして霧が晴れて行き
輝く武器を持った兵士たちが見えてきました
暗い夜明けがポロに明けて行きました
常に恐れていたものをすでに見ていました
- 2043 ポロはこの出来事にすっかり欺されました
彼は直ちに自分の軍を急いで整え
以前のようにすべてが良く配置され
僅かの間にすべてが決まりました
- 2044 ポロは前衛に四千人の騎士を置きました
くじで選ばれた極めて優秀な戦士です
優秀な弩使いが乗った 100 台の運搬車が
前列に配置されるために選ばれました
- 2045 この者たちは自分たちだけですべての兵を守ることができ
アレクサンダーは彼らを決して打ち破ることはできませんでした
しかし―彼らをしばしば打ちのめす凶運によって―
彼らは間違った道を行くことになったのです
- 2046 前日の夜非常に強い雨が降ったので
地面は一面泥に変わりました
車は泥の中をうまく進めませんでした
自在に動かず、何の役にも立ちませんでした

- 2047 アレクサンダー王は到着すると
直ちに怒れる稲妻のごとく彼らに攻撃をしかけました
愛馬ブシファルは泥をまったく気にかけず
会戦は大混乱になりました
- 2048 王と一体になって彼の素晴らしい臣下たちが戦いました
王は優秀で臣下は勇敢でした
敵が河岸を占領していたので
敵は動くことも攻撃に出ることもできませんでした
- 2049 両軍入り乱れて、攻撃が激しさを増しました
大きな叫び声が上がり、負傷者が大勢出ました
皆力一杯攻撃したので
あたかも己が罪の許しを相手に負わせているようでした
- 2050 ドン・ユルコス²²⁰⁾が皆をしのごとく
獐猛な象に乗ってアレクサンダー王を攻撃に来ました
王は彼を待ち構え、自分をしっかり守ることができました
ドン・ユルコスの望んだことは何も達成できませんでした
- 2051 アレクサンダー王は神と共に事を非常に良く準備できました
神は彼に味方し助けたいと思ったのです
アレクサンダーの手でドン・ユルコスは死ぬことになり
ポロのもとに同等の者はいなくなりました

- 2052 ギリシャ人たちは自分たちはうまく取りかかったと思いました
皆潑刺と戦いに臨み
熱い攻防になりました
彼らが夢見た事が現実になっていました
- 2053 アレクサンダーはすでにボロに近づこうとしていました
彼は決して他の者に目を向けようとしませんでした
しかしその日はかなわず
それで戦場から引き上げなければなりませんでした
- 2054 次の朝夜が明けると
人々は戦闘に戻り、戦場は人で一杯になり
止めたところで戦いを始めました
—吟遊詩人などに耳を貸さなかったでしょう—
- 2055 アレクサンダー王はボロを探して
軍の中に入り込みました、神の怒りを振りまきながら
ボロはといえば軍の右側に寄って行きました
そこでは戦いが熱を帯び、最も激しく展開されていました
- 2056 二人の忠実な臣下アストリとオポリダマスは
親族として王を護衛していました
彼らは戦闘において必殺の戦士だったので
名門のお王子たちの多くを打ち負かしました

- 2057 ルビクスとアリストネスが戦うことになり
槍を砕き、切り合いました
アリストネスの方が剣さばきが上でした
ルビクスがミスを犯し、苦戦することになりました
- 2058 カダセネスはポリダマスを攻撃しようとし
自分の力を信じ、彼を殺そうとしました
しかしガウトゥスというギリシャ人が背後から出てきて
カダセネスを突き刺し、それで彼は死ぬことになりました
- 2059 ギリシャ人たちは攻撃をうまく加え
敵の軍をすっかり壊滅させました
あらゆる防備をつけた鎌付き戦車も
ポロには全然役に立ちませんでした
- 2060 ギリシャ人たちは敵よりずっと有利に戦いを運んでいました
非常に軽快な馬と熟達のおかげで
象がいいくら強力でも
走る力は全然ありませんでしたから
- 2061 ギリシャ人たちは軽快な馬を持っていたので
敵に攻撃と後退を繰り返しました
象使いたちは、弩使いを除いて
皆全く役に立ちませんでした

- 2062 ギリシャ人たちは恨みを抱いていたので
敵に旗を立てて向かって行きました
ポロの兵士たちはそのようなことに慣れていなかったので
残っていた者たちは敗走しました
- 2063 ポロは形勢が非常に不利だと見ると
象で頑丈な囲いを作りました
石や石灰でできたものもそれほど堅固ではなかったでしょう
王も陣営もしっかりしていました
- 2064 ギリシャ人たちはどうやっても
それを破ることもポロに近づくこともできませんでした
彼を捕えることもそのままにしておくこともできず
どうしたらいいかも、どこへ行くべきかも分かりませんでした
- 2065 髭を生やした鼻を持った象がやって来て
アレクサンダーに多くの兵士たちの被害を与えました
象が十五歩も鼻を伸ばして
そのうちの一頭が四人の騎士を一度に倒したりしました
- 2066 我々は一あなたたちは嘆かないでください—ことを省略しなければ
ならないでしょう
この戦いは十五日は続くことになりました
ギリシャ人たちは毎日命令で戦っていました
しかしポロ王のところにはたどり着けませんでした

- 2067 アレクサンダーはなかなかの策略家でした
象に対してうまい奸計を思いつきました
アペレスにスズの人形を作ることを命じました
一年の日数の二倍だけの
- 2068 人形はすぐに作られ、用意されました
アレクサンダーはそれらを熱し、火のついた炭で周りを満たすように命じました
そしてそれらを鉄で覆った車に据えて、前へ出しました
もしそうしなければ、すぐに燃えてしまうでしょうから
- 2069 象たちはすぐに習慣通りに
人形を人だと思って、鼻で攻撃しました
しかし一度攻撃した象は
再び人に向かって行きませんでした、そんなに苦しみたくなかったのでしょう
- 2070 その上私は別の手柄の話も聞きました
アレクサンダーは豚を連れて来るように命じました
豚が唸り声を上げるのを聞くと象たちは逃げ出しました
そして再び豚の前に現れようとはしませんでした
- 2071 アレクサンダーは直ちに歩兵に前に出て
鋭い斧と良く切れるまさかりで
象に向かって行って、もも肉を切り取るように命じました
その毛の上に道が開けるように

- 2072 王の命令は立派に果されました
兵士たちはそれを忘れようとはしませんでした
意を決して敵に向かって行き
ほどなくして大きな突破口を開くことができました
- 2073 ギリシャ人たちもインド人たちも皆入り混って攻撃し合いました
メディア人たちもペルシャ人たちも同じでした
皆強い心で勇敢に戦いました
ポロの軍のうち、わずかな者たちだけが無傷でした
- 2074 アレクサンダーはポロを見張ることにしました
丘の上のしっかりした場所にある
城のような大きな要塞で
しかし間には超えなければならない大きな壁がありました
- 2075 兵士たちは前進したり、後退したりして
君主も臣下も皆決然としていました
馬は死者の中に乗り入れることはできず
君主たちは仕方なく馬を乗り捨てなければなりませんでした
- 2076 悪い風がインド人たちに襲いかかり
彼らは耐えることができず、散り散りになっていきました
彼らは馬を返して退却し始めました
ポロはこれを見ると不機嫌になりました

- 2077 こういうことは戦いで良く聞くことです
退却する者はどんなに少なくとも、逃げる者は多いものです
恐怖が彼らの義務を果たさせないのです
一度退却したら、呼び戻すのは難しいものです
- 2078 インド人たちはひどく怖じ気づいていました
勝利の女神がその杖で彼らを打ちすえたのです
多くのものが傷を負うことなく敗れました
しかし一旦退却すると留まってはいただけませんでした
- 2079 ポロは状況を十分に理解し、彼らを引きとどめようとして
大声で皆を罵り始めました
《友たちよ、お前たちは評価を下げようとしている
この世ではお前たちはその評価から決して逃れることはできない
だろう
- 2080 友たちよ、お前たちの王を見捨てることのないように
ポロがここで死ねば、お前たちの不名誉となろう
戦いに戻れ、お前たちはたやすく彼らを打ち破るだろうから
この世が続く限り、今日お前たちは名誉を得るだろう》
- 2081 ポロは多くを語ることも叱責することもできず
どうしても兵士たちを説得できませんでした
結局彼らが戦場に戻ろうとしないのを見ると
彼が戻り、戦い始めました

- 2082 親戚や近しい友たちは
—これらの者は少なくとも十五の重要な旗印でした—
不忠であるより死ぬことを望みました
もし皆がこうであったなら、ポロは幸せだったでしょう
- 2083 彼らは決然とした兵士として戦場に踏みとどまり
ギリシャ人たちに損害と傷を与えました
彼らはギリシャ人たちの問いかけにしっかり答えたので
ギリシャ人たちの心に重く残りました
- 2084 ^{まきば}牧場を血の川が急流となって流れました
それは一面に横たわった死んだ兵士たちのものでした
生者は死者のことを全然考えませんでした
戦って死ぬ者は名誉だと思っていました
- 2085 結局彼らは十分な抵抗ができなかったので
アレクサンダーが名誉を担うことになりました
兵士たちはポロの旗に近づきました
他の者たちをその場から追い払っていたので
- 2086 すべての攻撃がポロに向かい
かれは窮地に立ち、死ぬのではないかと恐れていました
その良き男は部下をすべて失っていて
世界に他の避難所は見つかりませんでした

- 2087 ポロは倒されたので、死んだか捕まったかしました
かれの象は致命傷を負って地面に倒れました
しかしこのような中でアレクサンダーは倒れたのです
生まれてから最悪のことでした
- 2088 俊敏で勇敢な愛馬ブシファルは
いつも素早く道を駆け抜けてきたのですが
腹部に重傷を負いました
はらわたが飛び出て鞍敷のようでした
- 2089 兄弟のトラクシロ²²¹⁾ がポロに近づきました
アレクサンダーの手に口づけしていたので彼の臣下です
《王様—とかれは言いました—もっともで非常に健全なことでし
よう
あなたがギリシャの王の慈悲にすぎることは
- 2090 彼は節度があり、非常に慈悲深い人間です
誰でも謙虚さで彼を負かすことができます
彼は我々を我々の地に住まわせてくれるでしょう
王様、もしあなたが別のことをしたら、それはとても愚かなこと
でしょう》
- 2091 ポロはトラクシロにひどく怒りました
自分を見放して不満だったからです
残っていた投げやりを彼に投げつけ
魂がなくなり冷たくなった彼の死体を野に捨てました

- 2092 愛馬ブシファルは死に際して気が遠くなりました
アレクサンダーはそれを察し降りました
完璧な愛馬は忠実で、倒れませんでした
脚元にアレクサンダー王を見るまでは
- 2093 ブシファルは主人の足元に倒れて死にました
そして良き皇帝は立ちつくしました
悲しまなかったと言えばウソになるでしょう
王は非常な栄誉をもって愛馬を葬るよう命じました
- 2094 後に王は愛馬が葬られている所に
堅固な城壁をもった町を作らせました
人々はそれをブシファリアと呼びました、とても立派な名前です
愛馬の名に因んで付けられたのですから
- 2095 良き王が馬を替えていると
ポロは状況が良くないのを見て決めました
彼は非常に良く走る馬に乗りました
アレクサンダーが見ると、彼はずっと遠くに行っていました
- 2096 アレクサンダーは非常に愚弄されたと思いました
ポロが自分の手から逃れたからです
というのは戦いすっかりは終わったものだと思っていたからなの
です
もしポロを捕えておけば

- 2097 ポロはあえて人里を信用しせず
より安全を期して山に登りました
しかしアレクサンダー王は彼に息つく暇を与えようとませんでした
た
すぐに跡を追い、行く手を遮ろうとしました
- 2098 しかし善人ガルテール²²²⁾は詩作に
疲れて、省略しようと思い
その時点で題材の多くを省きました
彼がそれを省いたので、私がそれを物語ろうと思います
- 2099 ポロに関して、どのようにして逃げたのか、彼は何も書きません
でした
二度目にどのように戻ったのかも
多くの驚異についても、多くの並外れた動物についても
アレクサンダーが勝ったことも、素晴らしい槍のことも書きません
でした
- 2100 比類なきアレクサンダー王には
彼の幸運をすべてにおいて完璧にすることを望んだのです
彼の願いで神はそのような力を示すそうとしました
聖ペトロにおいても達成するには大ごとになるような²²³⁾
- 2101 高い山ターカスピアス²²⁴⁾と呼ばれていますがーには
小さな通り道の他は入り口はありませんでした
アレクサンダーはその一つに多くの人が集まっているのを見まし

た

非常に多くの人々だったので数えることはできなかったでしょう

2102 皆一つの同じ言葉で話をし

皆この土地の固有の習慣を持っていました

彼らは東に向かって祈りを捧げていましたが

しかし貧弱な体格をしているようでした

2103 アレクサンダーは知ろうとして尋ねました

どういう人たちなのか、何をしている人たちなのかと

《王様—と一人の学者が言いました—恐れることはありません

これらの人々からあなたに何の不都合も生じません

2104 彼らは囚われの身になっているユダヤ人たちで

神が非常に哀れんだ人たちです

しかし彼らは神に忠誠を尽くすことを知りませんでした

それ故このような哀れな状態に置かれているのです

2105 彼らは心の弱い軽蔑すべき人々です

武器を取るには二頭のヤギほどの価値もありません

不浄なものを食する見下げた男たちです

猫が肺臓を欲しがるとより小銭を欲しがります》

2106 学者は王に彼らの歴史とすべての原因を語りました

エジプトの災禍とファラオの死

何においてそれらは後にアアロンを悩ませたのか

どのようにして名高いモーゼが律法を取りに行ったのかを²²⁵⁾

- 2107 学者はユダヤ人たちがどのようにして約束の地に入ったのか
 どのようにして同族の王を持ったのか
 しかし結局再び神と不和になり
 それ故神の呪いを受けることになったのかを語りました
- 2108 結局どのようにしてカルデアの王が来ることになったのか
 ユダヤを滅ぼすためにその全軍勢と共に
 そして聖都を村よりも貧しくして
 その戦いがユダヤ人たちを敗戦に追い込んだのかを語りました
- 2109 ユダヤ人たちは己が大きな罪のために不幸になった人々で
 ある者は滅ぼされ、ある者は囚われました
 生き長らえた者たちは惨めで苦しみ
 ここに入れられ閉じ込められています
- 2110 その上皆に厳しく禁じられています
 預言者によってこのように予言されたので
 女も男もそれほどの大胆さを持つことを
 考えの中でさえこの苦境を切り抜けようとするような
- 2111 《私は同意する—と王は言いました—、まったく正しいことだと
 神がかくも目をかけ
 しかもこのように悪く仕向けられて律法に背いた民は
 世の終わりまで閉じ込められるべきだろう》

- 2112 王は漆喰で出入り口を閉じるように命じました
決してまたユダヤ人たちが出入りできないように
そしてそこでいつまでも過越²²⁶⁾を祝わなければならないように
またそれを聞いた者たちが罪を犯すことを恐れるように
- 2113 王は最後に確かな判断に行き当たりました
創造主に頼んだのです、与えてくれるようにと
この状態がいつまでも続くような助言を
なぜなら人の手になるものは確かであり得ないからです
- 2114 王が祈りを終えると
異教徒であったけれど、神に聞き届けられました
岩が元の場所から各々動かされ
真ん中に埋め込まれ、出口が閉じられました
- 2115 しかし書は言っています、十分に信じるべきですが²²⁷⁾
世の終わりまで彼らがそこに閉じ込められているべきだと
それで終わりが近づくと彼らは逃げ出し
世界中を苦しめだろうと
- 2116 神は異教徒に対してそれ程のことをしてくださったのだから
それ程のことあるいはもっと、忠実なキリスト教徒にはしてくだ
さるでしょう
我々のせいでそのこと失わないようにしましょう、このことにつ
いて私は確信しています
神を疑う者は愚かで卑しい者です

- 2117 逆らうポロを追跡して
王はひどく興奮していました
残忍なアラン族²²⁸⁾の子犬のように
鹿と戦っている最中の
- 2118 王は豊かな場所を搜索していて
ポロが良く住んでいた宮殿を見つけました
そこで休むのが習慣でした
ポロが体を楽しませたい時に
- 2119 宮殿の作りは忘れがたいものです
我々はそれをふさわしく語ることはできないのですが
我々が本当のことを賞賛しようとしても
それでもまだそれを疑う人が何人かいるでしょうから
- 2120 その場所は平らで、豪華に据えられていました
獲物、特に鹿が多くいて
山々がすぐ近くにあり、そこでは家畜が草を食べていました
そこは夏でも冬でも温暖な地でした
- 2121 宮殿は巨匠によって建てられました
それは見事に正確に設計されていて
土台は自然の岩の上に据えられ
水でも火でも破壊されることはなかったでしょう

- 2122 壁は真っ白に塗られ、堅固なものでした
そこには壁掛けもタペストリーも必要ありませんでした
天井は紐や網目の模様で飾られていました
すべては、あなたたちが神を信じているように、確かに純金で出来ていました
- 2123 扉はすべて自然の象牙で
純粹の水晶のように白く輝いていていました
その細工は繊細で、繰り形はかなり高いところにありました
王の住まいでしたが、豪華なものでした
- 2124 そこには四百本の柱がありました
すべて純金でした、柱頭も基盤も
燃えている燐^{おき}でもこれ以上輝いていなかったでしょう
というのはそれらは非常に光沢があり、非常に平らで、非常に滑らかだったからです
- 2125 部屋数は多く、皆檀がついていました
細工を施した羽目板はすべて糸杉でした
それらはお互いに微妙につながり合って
どこが始めなのか分からないほどでした
- 2126 部屋の周りの柱から吊り下がっていました
素晴らしいぶどうが―最上のものです―
それはシュロのような大きな金の葉をつけていました
―そのようなものを私も持ちたいものです、神のお助けを―

- 2127 ぶどうの実はとても美味しいもので
それらは皆非常に価値のある宝石でした
最も出来の悪いものでも非常に素晴らしいものでした
—ぶどうを植えたものは非常な知恵の持ち主でした—
- 2128 ぶどうの間には色々な種類があるように
そのように宝石にも色々な形状のあります
あるものは緑色で、あるものはすっかり熟した色合いです
霜も暑さもそれらを決して害しませんでした
- 2129 そこでは人は遅なりのぶどうと
他のもっと早なりのミガルエラ種のぶどうと
黄色になるのアルフォンソ種の白ぶどうと
もっと紫色のアルフォンソ種の黒ぶどうを見つけるでしょう
- 2130 貯蔵用の美味しいカラグラニャ種のぶどう
老婆たちを走らせるモレハ種のぶどう
踏み桶に適したジューシイな白ぶどう
これらすべてを人が言ったり思いついたり出来ないでしょう
- 2131 みずみずしいぶどう畑は置いておいて
それは遅摘みと早摘みがありますが
広場にあった木の話をししましょう
そこには非常に貴重な富が横たわっていました

- 2132 完璧な場所であるその中庭の中に
素晴らしい木が中央に立っていました
あまり太くも細くもなく
繊細に細工された純金でできた木でした
- 2133 空の鳥は皆声を合わせて
心地よい、短い、そして長い歌を歌い
皆その木に彫り込まれているようでした
各々種類によって色で区別されて
- 2134 吟遊詩人たちが使うすべての楽器と
学徒が使うもっと高価な楽器
そのすべてがそこでは三つか四つの対になっていて
歌を演奏するために皆良く調律されています
- 2135 木の根元に、優に十五エスタド²²⁹⁾ある所から
管が何本か来ていて土に埋まっていました
それらは硬い銅で出来ており、細工が施されており
すべて木の中に埋め込まれていました
- 2136 その管でふいごを吹くと
すぐに鳥たちが各々自分の音を奏でました
カケス、ヒバリ、ツグミ、イワツバメ
そして美しい歌を歌うナイチンゲール

- 2137 鳥の話をするのは長くなるでしょう
 一夜が近づいています、私はあなたたちに省略してお話したい—
 私は他のどれを省いたらいいのか分かりません
 (製作者は) 蟬さえ忘れようとしなかったのに
- 2138 楽器と鳥の声が混ざり合っていました
 弦とキーが正確に調和して
 高くなったり、低くなったりして心地よい歌を奏でていました
 オルフェウス²³⁰⁾にとってもこのようにするのは大変だったでしょう
- 2139 そこでは音楽と歌が調和していました
 優しい旋律、泣くような半音
 心の苦悩を表すバラード
 これらは行進曲に優に勝るものだったでしょう
- 2140 世の中にそのように賢い人はいません
 そこにある心地よさは何なのかをあなたたちに言うことができる
 ような
 人がそのような喜びの中に生きている間は
 渇きも飢えも怒りも苦痛も知らなかったでしょう
- 2141 他のことであなたたちは驚くかも知れません
 もし望めば鳥の半分だけを歌わせることができたでしょう
 もし望めば三分の一の鳥を、もし望めばつがい
 師はそれができる才知のある人でした

- 2142 アレクサンダーはそれをひどく奇妙だと思い
そんな奇妙な豊かさは見たことがないと言いました
皆はそれが非常な高貴さだと言いました
そのような高貴な気高さを耳にしたことはありませんでした
- 2143 そのすべての新奇さ故に、そしてそれらの喜び故に
アレクサンダーは苦しみを忘れていませんでした
彼のすべての望みとすべての執念は
ポロー人と彼の擁護者にありました
- 2144 アレクサンダーがこの非常な苦悩の中にある間
どこにポロを見つけに行けばいいの分かりませんでした
確かな密偵が来て
バクトリアで見つかると言いました
- 2145 密偵はアレクサンダーにポロが兵力と資金と用意していると言いま
しました
戦場に来て彼の兵士たちと戦うために
そして非常に多くの軍団を率いようと考えているので
ギリシャ人たちを不良少年のように侮辱しようとしていると言いま
しました
- 2146 アレクサンダーは時をおかず出発しました
彼の心は喜びで軽くなっていました
しかしあまりに厳しいやりかたに
途中で多くの兵を失いました

注

- 214) この連は象を初めて見た者の誤った印象か
- 215) 現在のパンジャブ（パキスタン）地方の Jhelum
- 216) この部分ラテン語《Non est in die festo》（祭日ではない）
- 217) これも後世の作者の判断
- 218) ギリシャ神話
- 219) マケドニアの将軍
- 220) この叙事詩の底本の作者と言われる Gautier の創作になる人物
- 221) 実際は兄弟ではない
- 222) この叙事詩の底本の作者 Gautier のこと
- 223) ここでも時代が飛んでいる
- 224) カスピ海に面した島々
- 225) 旧約聖書出エジプト記
- 226) 旧約聖書出エジプト記 12 章
- 227) 旧約聖書エゼキエル書 38-39、新約聖書黙示録 20、7-10
- 228) カスピ海北岸にいたイラン系騎馬遊牧民族、5 世紀にイベリア半島に侵入
- 229) 一エスタドは人間の背の高さくらいの長さの単位
- 230) ギリシャ神話でアポロンの息子で吟遊詩人、豎琴の名手

参考図書・辞書

- Libro de Alexandre Real Academia Española Madrid 2014
- Libro de Alexandre Nueva Biblioteca de Erudición y Crítica Editorial Castalia Madrid 2007
- Libro de Alejandro Editorial Castalia Madrid 1985
- Book of Alexander Peter Such and Richard Rabone Oxbow Books Oxford 2009
- Vocabulario de Libro de Alexandre Anejos del Boletín de la Real Academia Española Madrid 1976
- アレクサンドロスの書・アポロニオの書 橋本一郎 大学書林 1991
- Diccionario Medieval Español Martín Alonso Universidad Pontificia de Salamanca 1986
- Diccionario de Castellano Antiguo Manuel Gutiérrez Tuñón Editorial Alfospolis 2002
- Tentative Dictionary of Medieval Spanish Lloyd A.Kasten and Florian The Hispanic Seminary of Medieval Studies New York 2001
- Larousse Universal Diccionario enciclopédico Librairie Larousse Paris 1968